

【評者】
大藤 貴
国立国際医療研究センター
国府台病院呼吸器内科



その呼吸器診療 本当に必要ですか？ あるかないのかエビデンス 倉原 優 著

● A5 頁 336 2019年1月
定価：本体 4,200 円＋税
[ISBN978-4-260-03672-6]医学書院刊

「それってエビデンスがあるんですか？」

上級医とのコミュニケーションや、カンファレンスにおいて、誰もが言われたことがある言葉ではないだろうか。そして、誰もその言葉にネガティブな印象をもっている。何となく「根拠のない治療をしている」とか、「こんなことも知らないのか」と言われたような気分になるからである。

科学としての医療に「エビデンス」は欠かせない。われわれ医師が医療で決断をする場合、科学的根拠があるか、ロジックは矛盾していないか、常に考え続けなければならない。医師として働いていくうえで、どこまでわかっているか、どこからはわからないか、を常にアップデートしていく必要がある。

本書の著者は有名なブログ「呼吸器内科医」の倉原優先生である。彼のブログにはいつも最新の情報が掲載され続けている。私もそのブログの読者になり、はや10年が経過した。この長い期間、少しずつ積み重なった知識は想像も及ばない。その膨大な知識で、呼吸器内科の全般に及ぶ分野に切り込んだのが本書である。どこまでわかっているのか、わかっていないのか、そして今、どうすればいいのか。まさに呼吸器内科のカッティングエッジである。最先端であり、かつ意見も分

かれてくる領域を扱っている。

内容は「すべての呼吸器疾患患者に全力聴診が必要なのか？」という項目から始まる。すぐに引き込まれて、最後の項目まで夢中で読んでしまった。同意するところが多数あるが、自分ではこうかもしれないと思うところもあった。読んでいくうちに、改めて自分自身の知識とプラクティスを見直す体験をした。これこそが本書の醍醐味であると考えてる。

すべての項目についてお勧めできるが、特に参考になったのは「間質性陰影のある患者さんに対するじゅうたん爆撃的自己抗体採血」である。すべての呼吸器内科医が昔から、そして将来も考え、悩み続けている項目ではないだろうか。同じグループに所属していると、他の施設のプラクティスはわからない。こういう考えもあるのか、こうしているのかと参考になった。そして、同じ場面で今後は自分ならどうしようか、と考えた。

私は本書を「現場で働く呼吸器内科医」すべてにお勧めする。いつか読むのではない、この本の知識が古くならない今、手にとって読んでいただきたい。生きた知識がここにある。